

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 29 日現在

機関番号：33901

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21720151

研究課題名（和文）近代の欧人基督教宣教師の訳著にみる中国語研究と異文化翻訳について

研究課題名（英文）The study of Chinese and cross-cultural interpretation in the translations of the books by the Western missionaries in Modern Times.

研究代表者

塩山 正純（SHIOYAMA MASAZUMI）

愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：10329592

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は近代の欧人基督教宣教師の著作における記述内容から、その中国語研究と異文化翻訳について考察したものである。

中国語研究に関しては、モリソン、メドハースト、ロプシャイトの中国語研究の特徴について考察した。ロプシャイトについては、北京官話が重視されつつあった時代下にむしろ言語（方言）の多様性や地域性を重視していたこと、北京官話と広東語の双方を比較対象として相対的に捉えていたこと、英語語法に基づき全面的な品詞分類と分析を行ったこと、特に量詞の語法上の特徴を的確に捉えていたこと等を指摘した。また、モリソンとメドハーストの中国語会話教科書における記述を資料として、西洋人宣教師が記述した「官話」の実像の経年変化について考察を行い、その成果を国際シンポジウムで発表したのち、論文集に発表した。さらに、近代西洋人の中国語研究の代表的著作に記述された「官話」の定義の変遷を時系列にまとめて分析し、その概念の変遷を詳細に跡付けるとともに、19 世紀における官話の地域差を反映するものとして、一連の各官話訳聖書の資料としての有用性を指摘した。

異文化翻訳に関しては、ケンブリッジ大学図書館での所蔵が発見された中国語訳聖書『四史攸編』稿本について、その他の稿本（大英図書館本、ローマ本など）と対照を行い、聖書の中国語訳の系譜に関する考察を行った。さらにモリソン訳聖書で使用された白話虚詞の特徴について論文にまとめ、国内学会では、モリソンの中国語訳聖書翻訳の過程について招待報告を行った。これら一連の研究の成果については後述の通りである。

研究成果の概要（英文）：

This study explores the Chinese language and translations across the cultures based on the descriptions in the books written by the Western missionaries in Modern Times.

The study of Chinese was carried out to examine the features of the studies by Morrison, Medhurst and Lobscheid. Lobscheid points out the importance of the diversities of dialects, an equal value between Mandarin Chinese and Cantonese by relatively comparing them, classification and analysis of part-of-speech according to English grammar, and a comprehensive account of the grammatical features of the quantifier. The chronological development of Mandarin has also been investigated by scrutinizing the textbooks of conversation by Morrison and Medhurst. Moreover, the changes of the definition and concepts of “Mandarin” that were provided in important books in the study of Chinese by modern Westerners were listed in chronological order. I suggest an application of a series of the Bibles translated into Mandarin representing the regional differences of Mandarin in the 19th century.

The analysis of cross-cultural interpretation was mainly performed by comparing the version of the Chinese translation of the Bible in the collection of Cambridge University library to such other versions as BL and Rome. As a result, a hypothesis has been proposed. In addition, the grammatical characteristics of colloquial words in the translated Bible by Morrison and the process of his translation will be discussed later.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：欧人基督教宣教師、近代中国語、異文化翻訳、中国語訳聖書

1. 研究開始当初の背景

近代中国における西学東漸は「文化の受容と語彙の創造」の面で、中国語に大きな影響をもたらした。来華キリスト教宣教師による「英華・華英字書類の編纂」と「聖書の中国語訳」、「中国語研究書」に代表されるように、当時の中国語研究に大きく貢献した。近年、「字書類の編纂」に関する研究が飛躍的に進んだが、「中国語研究」と「聖書の中国語訳」つまり異文化間の翻訳については、扱うべき資料が膨大で、これまで語学からのアプローチは十分とはいえない状況であったと言える。例えば、聖書翻訳に関してはわずかに、吉田寅 1997 など、一部の先行研究が訳文を部分的に対比し、一部分の翻訳語の紹介を行っているにすぎない。中国をはじめ諸外国においても、先行研究の焼き直しの傾向が極めて強く、新たな進展が乏しいのが現状である。内田 2000 が官話研究における資料としての有用性を指摘し、塩山 2000 が『神天聖書』の虚詞の用法と文体の語彙的特徴を考察し、本課題の業績一覧にあるように、その後の一連の研究によって漸く基礎的な研究が始まったところである。

また、「中国語研究書」については近年、関西大学の内田慶市教授による研究によってその系譜の概略が明らかになり、さらに少数の研究者によって幾つかの個別文献に関する研究にも着手されつつあるが、例えば、モリソン、メドハーストの教科書類やロプシャイトの語法書など早期に考察されてしかるべき資料がほぼ手付かずの状態にあった。

西洋人の手による中国語研究書やテキストにおける中国語に関する記述を分析し、時系列にまとめることは「西洋人が中国語という言語をどのようにとらえてきたか」という問題を知る上で必要な作業であると考えられる。

また、中国語訳聖書や解説書の語彙や文体は、西洋人宣教師が学んだ当時の中国語が翻

訳という実践形式で表現された一級の資料である。同時に、西洋人による中国語研究をその実践面から考察する上でも、有用な資料であると言える。翻訳過程で参照された白話作品や吏文の語彙や文体といった中国側資料とも比較対照を行うことにより、西洋人（宣教師）が学び研究した 19 世紀初頭の中国語と、東西言語文化の接触と異文化翻訳の一端を解明できるのではないかと考えられるのである。

2. 研究の目的

近代中国における西洋「文化の受容と語彙の創造」で、西洋人キリスト教宣教師の活躍が中国語に大きな影響をもたらした。また、中国語のアウトサイダーの視点からの中国語研究によってあまたの著作が生まれた。代表的な成果としての初期中国語訳聖書類や中国語研究の著作を、本研究課題では、関連する資料とともに収集・整理・電子テキスト化し、それらを利用して西洋人による「異文化翻訳と中国語研究」について調査・考察を行おうとするものである。

3. 研究の方法

研究計画としては「聖書の中国語訳の系譜」と「異文化の翻訳」という東西の言語文化接触をキーワードとして常に念頭に置いて、資料を収集調査し、研究を遂行する。通常の研究作業については、申請書に記述した【本研究課題の概略図】の手順に基づき、塩山正純（研究代表者）本人が、課題全体の統括と具体的な研究作業、つまり、①基礎作業の整理、清書、活字化、電子テキスト化、及び②具体的項目のうち電子テキストの校正、資料の印刷、製本作業などを行った。

また、学外の研究者（関西大学・内田慶市：欧人の語学研究、京都ノートルダム女子大学・朱鳳：モリソンの辞書編纂と中国語学習、中央大学・千葉謙悟：欧人資料による音韻学、

関西大学・沈国威：日中欧語彙交流、ほか数名）と資料等の情報交換を行い、研究遂行のための助言等、時代・分野を広くカバーした支援を得た。

研究成果は国内における研究会、および海外学会、シンポジウムにおいて発表するとともに、各国の研究者と最新の情報交換を行った。また、随時成果を資料集（具体的には電子テキスト）、索引（目録）、論文等にまとめ、目録と論文は実際に学術誌に発表した。海外現地調査としては、主にヨーロッパの主要図書館で実施したが、詳細については後述の通りである。国内調査については、申請書で予定していたもののうち、主として関西大学増田文庫・尾崎文庫等で、官話訳の中国語訳聖書に拘るもの、中国語研究書を中心に行った。

4. 研究成果

本項目の内容としては、まず概要を述べ、各成果の詳細については個別成果を時系列に列挙したものを基に後半部分で記述する。

2009年度は、主にいずれも基督教宣教師であるモリソンの中国語会話テキストにおける記述の特徴、ロプシャイトの中国語研究の特徴について考察を行った。ロプシャイトは近代早西洋人による中国語研究において、きわめて明確に中国語の品詞を分類して記述した人物であり、その品詞分類における特徴を中心に、国外開催の国際シンポジウム・ワークショップ等（ボン大学、オスロ大学、北京外国語大学、ローマ大学（非公式））で4件報告を行った。国内学会（洋学史学会）では、モリソンの中国語訳聖書翻訳の過程について招待報告を行った。

また、ロンドン大学 SOAS 図書館、大英図書館（計2回）、ローマの基督教イエズス会関係の図書館（カサナテンス図書館、1回）にて本研究課題に関連する資料調査・収集を行った。とくに SOAS では、モリソン 1824 の中国に関する問答集、会話教科書等の数点について閲覧と複写・写真撮影を行い、電子テキスト化の作業を順次開始した（2010年度に一応完了し、現在は最終的な整理作業中である）。上述した収集資料の問答集（英語で記述）、会話教科書（官話で記述）の内容は当時の中国の基本情報を網羅しており、資料価値が高いものである。とくに会話教科書については後述の通り 2010 年度以降に同資料の中国語の特徴に関する記述を中心に考察した。また、ローマでの現地調査では基督教イエズス会に關係する図書館（カサナテンス図書館）を訪問し、ジャン・バセ著訳の中国語訳聖書の原本を閲覧調査した。この調査で得られた結果についても、従前の成果と 2010 年度以降のイギリスにおける現地調査の結果と合わせて研究発表と論文にまとめた。

2010年度は、まずプロテスタント宣教師であるモリソンの中国語会話テキストにおける記述について、前年度から継続して考察を行い、その成果の一部を韓国・鮮文大学で行われた国際シンポジウム「清代民国時期漢語国際学術研討会」で発表した。同発表をもとにした論文については、2011年度に出版された論文集に掲載された。また、モリソン後のプロテスタント宣教師であるメドハーストが、モリソンの会話教科書を踏襲して出版した中国語教材における記述についても考察し、その成果の一部は、イタリア・ローマ大学で行われた国際シンポジウム「“欧洲人的汉语研究历史” 国际研讨会暨世界汉语教育史研究学会第三届年会」にて発表し、これをもとに加筆修正した論文「メドハーストの中国語教材にみる官話の一端」を『文明21』26号に掲載した。

また、2009年度より継続しているロンドン大学 SOAS 図書館、大英図書館での資料調査に加えて、2010年度はケンブリッジ大学図書館での資料調査・収集も行った。この調査では主として、同図書館での所蔵が明らかになった中国語訳聖書稿本『四史攷編』の新たな稿本（ケンブリッジ本）と既存稿本（大英図書館本、ローマ本など）との対照を行い、写真資料を申請し受理された。同調査での成果をもとに、論文「近代の中国語訳聖書の系譜に関する覚書き一ベースの『四史攷編』を中心に一」を『言語と文化』24号に掲載した。

このほか、現在までに収集した資料の電子テキスト化の作業を進行中であり、2010 年度時点でモリソンとメドハーストの会話教科書各1冊の入力を完了している。

最終年度の 2011 年度には、口頭発表で、近代西洋人の中国語研究の著作に記述された「官話」の定義の変遷を時系列にまとめて分析し、各官話訳聖書の資料としての有用性を指摘した。また、メドハーストのテキストについて口頭発表したものを論文「馬禮遜の中国語教科書簡析」としてまとめた。また、中国語訳聖書について、ケンブリッジ大学で閲覧調査した『四史攷編』稿本に関する分析を「近代汉译圣经的源流—以巴设的所谓《四史攷編》为中心」として口頭発表した。さらにモリソン訳『神天聖書』で使用された白話虚詞の特徴について、論文「中国語訳聖書『神天聖書』の翻訳語彙の幾つかの特徴について」にまとめた。

現地資料調査では、ケンブリッジ大学図書館にて、『四史攷編』の後継稿本ならびに 19 世紀後半から 20 世紀初頭の各官話訳聖書の資料調査を行い、『四史攷編』後継稿本の一部と北京官話訳聖書 1 件について写真資料として入手することが出来た。また、モリソンの聖書中国語訳に大きな影響を与えた

モズリー司教の論文1件を大英図書館にて複写することができた。

さらに、本研究課題の成果を社会還元するため、研究期間中と2012年度の計3回、社会人向けの一般公開講座を担当した。

上記内容と重複する点もあるが、以下に、中国語研究と異文化翻訳の2つのテーマ別に期間中の研究発表と論文を時系列に並べる形式で、成果の詳細について報告する。なお便宜上、各成果の冒頭に通し番号を付しておく。

2009年度は、中国語研究に関しては、モリソン、といった人物の研究書と並んで重要資料の一つとされながらこれまで詳細に研究されていなかったロプシャイトの *Grammar of the Chinese Language* 1864 の特徴について、それぞれ視点を変えて研究発表3件と研究論文2件において考察を行った。

研究発表では、(1)「羅存徳怎樣分析漢語語法？」(「德国汉学百年—历史、方法、前瞻」研讨会(2009年6月3日)ドイツ・ボン大学)において、ドイツ語母語話者であるロプシャイトが英語で執筆した中国語研究書である *Grammar of the Chinese Language* 1864 における全般的な特徴について考察した。さらに、

(2)「罗存德的汉语语法研究」(Workshop “近代东西语言文化交流的史实与影响”(2009年9月1日)ノルウェー・オスロ大学)とローマ大学での非公式ワークショップでは、本資料は西洋資料の中でも中国語の語法上の特徴の一つである量詞について極めて詳細に扱った嚆矢であることから、とくに本資料における量詞の分析の特徴について考察した。そして、(3)「淺論羅存徳對近代漢語的看法」(“世界汉语教育史研究”研讨会(2009年12月16日)中国・北京外国語大学)において、ロプシャイトが「近代中国語をどのように捉えていたか」をまとめた。

以上の口頭発表と他の研究者との議論を踏まえた成果を、(4)「羅存徳怎樣分析漢語語法？」(『国際漢学』近刊・校正中(査読無))と(5)「淺論羅存徳對近代漢語的看法」(『世界汉语教育史研究』研讨会论文集』近刊・校正中(査読無))の2件の論文にまとめた。論文では、アヘン戦争後に北京官話がより重視されていく状況下でもロプシャイトはむしろ中国国内の言語(方言)の多様性や地域性を重視していたこと、北京官話と広東語を比較の対象として相対的に捉えていたこと、英語の語法に基づき品詞分類について全面的な分析を行ったこと、とくに量詞の語法上の特徴を的確に捉えていたこと等をそれぞれ指摘した。

さらに、論文(6)「モリソンが会話テキストに書いた中国語」(愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』23号69頁-91頁2009年(査

読無))では、電子テキストとして入力したモリソンの著作である中国語会話テキスト *Dialogues and detached sentences in the Chinese Languages (Macao 1816)* の発音表記、語彙、文体の特徴について初歩的な考察を試みた。

異文化翻訳に関しては、招待講演(7)「モリソンの『神天聖書』翻訳の過程について」(洋学史学会シンポジウム(2009年12月13日)青山学院女子短期大学)にて、主にモリソンの『神天聖書』翻訳の過程で、各福音書でどのような特徴が見られるのか、について発表した。

2010年度は、中国語研究に関しては、まず前年度にまとめた論文(6)をさらに詳細に考察し、テキスト本文の出典を明らかにしたものを、(8)「馬禮遜的中国語教科書簡析」(清代民国時期漢語國際學術研討会(2010年5月3日)韓国牙山市・鮮文大学)として口頭発表を行った。さらに、モリソンの後継テキストとも言えるメドハーストとその息子による *Chinese dialogues, questions, and familiar sentences, literally rendered into English, with a view to promote commercial intercourse, and to assist beginners in the language* 1844, 1863 について、初版、2版間の異同を調査するとともに、モリソンのテキストと比較対照することによって、「官話」の経年変化を分析したものを、(9)「麦都思的汉语教科书简析」(“欧洲人的汉语研究历史”国际研讨会暨世界汉语教育史研究学会第三届年会(2010年9月13日)イタリア・ローマ大学)として口頭発表し、その成果を論文(10)「メドハーストの中国語教材にみる官話の一端」(愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』26号頁-頁2011年(査読無))にまとめ、とくに初版からアヘン戦争を経て出版された2版の間で、記述された「官話」の特徴が明らかに南から北へ移動しつつあることが確認できることを指摘した。

異文化翻訳に関しては、2009、2010両年度のイギリス、イタリアで閲覧調査した所謂『四史攷編』各稿本の系譜について、論文(11)「近代の中国語訳聖書の系譜に関する覚書き—バセの『四史攷編』を中心に—」(愛知大学語学教育研究室『言語と文化』24号頁-頁2011年(査読無))で考察した。

最終年度の2011年度には、中国語研究に関しては、口頭発表(12)「西洋資料に記述された「官話」の定義と「(虚・実)像」について」(中国近世語学会2011年度秋季研究集会ワークショップ「官話の虚像と実像」(2011年12月10日)大東文化大学)は、近代西洋人の中国語研究の著作のなかに記述された「官話」の定義の変遷を時系列にまとめて分析したものであり、また各官話間の比較対照研究については各官話訳聖書が有力

な資料となりうることを指摘した。この口頭発表は、本研究課題の成果のまとめの一つであり、また同時に次の研究課題の前提となる着想をまとめたものである。また、前年度にメドハーストのテキストについて口頭発表したものを論文(13)「馬禮遜的中国語教科書簡析」(韓国・學古房『清代民國漢語研究』263頁-275頁 2011年(査読無))としてまとめた。

異文化翻訳に関しては、前年度の論文(11)にケンブリッジ大学で閲覧調査した『四史攸編』稿本に関する分析を加味し、(14)「近代汉译圣经的源流—以巴设的所谓《四史攸编》为中心」(第二届日意研究生学术论坛・主题:近代文化交渉和语言接触(2011年9月10日)イタリア・ローマ大学)として口頭発表した。さらにモリソン訳『神天聖書』で使用された白話語彙のうちその大半を占める“的”、“個”、“了”の3語の用例における特徴について、論文(15)「中国語訳聖書『神天聖書』の翻訳語彙の幾つかの特徴について」(愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』28号頁-頁 2012年(査読無))にまとめた。

また、本研究課題の成果を社会還元するため、研究期間中に2回、さらに2012年度に入ってから1回の計3回、近代西洋人の中国語研究と異文化翻訳について、社会人向けの一般公開講座を担当した。各回の講座とテーマは以下の通りである。

(1)「西洋人の学んだ中国文化と中国語」愛知大学車道校舎オープンカレッジ「中国古典に親しむ」(2010年12月2日)

(2)「近代における聖書の中国語訳—ロバート・モリソンの場合—」愛知大学車道校舎オープンカレッジ「中国古典に親しむ」(2011年12月8日)

(3)「モリソンとその聖書漢訳の過程」公開講座『言語』(2012年5月12日)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

(1) 塩山正純「モリソンが会話テキストに書いた中国語」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』23号69頁-91頁 2009年(査読無)

(2) 塩山正純「羅存徳怎樣分析漢語語法？」『国際漢学』近刊・校正中(査読無)

(3)「淺論羅存徳對近代漢語的看法」『世界汉语教育史研究』研讨会论文集』近刊・校正中(査読無)

(4) 塩山正純「近代の中国語訳聖書の系譜に関する覚書き—バセの『四史攸編』を中心

に—」愛知大学語学教育研究室『言語と文化』24号83頁-100頁 2011年(査読無)

(5) 塩山正純「メドハーストの中国語教材にみる官話の一端」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』26号29頁-39頁 2011年(査読無)

(6) 塩山正純「馬禮遜的中国語教科書簡析」韓国・學古房『清代民國漢語研究』263頁-275頁 2011年(査読無)

(7) 塩山正純「中国語訳聖書『神天聖書』の翻訳語彙の幾つかの特徴について」愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』28号75頁-83頁 2012年(査読無)

[学会発表](計8件)

(1) 塩山正純「羅存徳怎樣分析漢語語法？」“德国汉学百年—历史、方法、前瞻”研讨会(2009年6月3日)ドイツ・ボン大学

(2) 塩山正純「罗存徳的汉语语法研究」Workshop “近代东西语言文化交流的史实与影响”(2009年9月1日)ノルウェー・オスロ大学

(3) 塩山正純「モリソンの『神天聖書』翻訳の過程について」洋学史学会シンポジウム(2009年12月13日)青山学院女子短期大学

(4) 塩山正純「淺論羅存徳對近代漢語的看法」“世界汉语教育史研究”研讨会(2009年12月16日)中国・北京外国語大学

(5) 塩山正純「馬禮遜的中国語教科書簡析」清代民國時期漢語國際學術研討会(2010年5月3日)韓国牙山市・鮮文大学

(6) 塩山正純「麦都思的汉语教科书简析」“欧洲人的汉语研究历史”国际研讨会暨世界汉语教育史研究学会第三届年会(2010年9月13日)イタリア・ローマ大学

(7) 塩山正純「近代汉译圣经的源流—以巴设的所谓《四史攸编》为中心」第二届日意研究生学术论坛・主题:近代文化交渉和语言接触(2011年9月10日)イタリア・ローマ大学

(8) 塩山正純「西洋資料に記述された「官話」の定義と「(虚・実)像」について」中国近世語学会 2011年度秋季研究集会ワークショップ「官話の虚像と実像」(2011年12月10日)大東文化大学

〔その他〕

文献目録

(1) 「清代民国時期漢語研究文献目録「泰西資料」」 韓國・學古房『清代民國漢語研究』
293 頁-353 頁 2011 年（査読無）石崎博志、
千葉謙悟氏との共編

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塩山 正純 (SHIOYAMA MASAZUMI)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・
准教授

研究者番号：10329592

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし